2024年7月14日 久宝教会 部落解放祈りの日礼拝メッセージ

「恐れることはない」　　水谷憲牧師

聖書 ヨハネによる福音書 6章 16−21節

「恐れ」というのは、私たちの最も基本的で原始的な感情なのだといいます。辞典などによると、「それに近づくと（それが身近に現れると）、無事に済みそうもないと思われて、避けたいと思う感じ」だとか、「自分の力を超えたものにおびえ、不安に思う気持ち」などと説明されています。そしてそのような「恐れ」は、さまざまな「危険」に際して私たちの生命そのものを守る役割を果たしているという意味において、非常に重要な感情だともいえます。旧約聖書の昔では、アダムとエバが蛇にそそのかされ、食べるなと神様に命じられていた善悪の知識の木の実を食べてしまったところまでさかのぼることができます。創世記3：8−10をお読みいたします。

「その日、風の吹く頃、主なる神が園の中を歩く音が聞こえてきた。アダムと女が、主なる神の顔を避けて、園の木の間に隠れると、主なる神はアダムを呼ばれた。『どこにいるのか。』彼は答えた。『あなたの足音が園の中に聞こえたので、恐ろしくなり、隠れております。私は裸ですから』」

この創世記でいうと、アダムたちは神様に「善悪の知識の木からは、決して食べてはならない。食べると必ず死んでしまう」と言われていたのに神様の言うことを聞かず裏切ってしまったことから、自分たちは神様によって罰せられ命をも取り上げられてしまうかもしれないと非常な恐れを感じたのでしょう。まさに「神様に近づくと、無事に済みそうもないので避けたい」とか「自分の力を超えたもの（神様）に対して不安に思う気持ち」であったわけです。

しかし、直接自分の命を脅かすものではなくとも、例えば家族がみんな死んでしまって一人ぼっちになってしまったらとか、会社をクビになったらどうしようとか、そのような今後の自分についての漠然とした不安という形での「恐れ」というものもあるでしょう。「そのような状況が身近に現れたら、とても無事に済みそうもない」とか「自分の力を超えたもの（自分ではどうにもコントロールできない状況）に対して不安に思う気持ち」ですね。そういう経験で言えば、私が熊本の大学を何度も落第しながら、地元のパン屋に就職も決まり、さあ卒業だと思った時に、大学の事務員に「あなたあと1科目単位が取れてませんから卒業できませんよ」と言わ

れた時の思いは忘れることができません。顔から血の気がさーっと引いていくのが自分でもよく分かりましたし、喉がやたらに渇いて胸もどきどきするし、よく目の前が真っ暗になるとか言いますけれども、私は実際目の前が真っ白になりました。頭の中も真っ白で、「ああ両親に何て言おう」「会社にも何て言おう」（まあそのまま言うしかないのでそのまま言ったんですけど）、これからどうしよう、そういう不安とか恐れでいっぱいでした。単位を落とした教授のところにダメもとで、と思ってお願いに行く時、友人が「これ持って行き」と言って折り畳みナイフを貸してくれましたが、どう見ても自分が悪いものですから、結局そんな物使うことができませんでした。あの当時はさすがに、自分は人間としてだめなんじゃないか、こんな自分に生きている意味があるのか、そんな自分の将来や自分の存在価値に対する恐れでいっぱいであったわけです。

本日の聖書はヨハネによる福音書6：16－21、イエス様が湖の上を歩く、という話ですが、ここでは私たちの命の危機、または自分の存在に関する「恐れ」について、神様が私たちに何らかの示唆を与えてくれる箇所であるように思うわけです。本日の箇所の冒頭には、「夕方になったので」と記されています。それまでみんなは何をしていたのかというと、その前の部分を読むと分かるのですが、イエス様は弟子たちや5千人もの群衆と一緒にガリラヤ湖畔で食事をしていたわけです。食料は大麦のパン5つと魚2匹しかありませんでしたが、イエス様が感謝の祈りと共に皆に分け与えたところ、5千人もの人がみな満腹し、残ったパン屑を集めると12の籠がいっぱいになったという奇跡の食事でありました。そのあとイエスは1人で山に退かれたとあります。そこからが今日の聖書の話になるわけです。

奇跡の食事が終わり、夕方になったので、弟子たちは湖畔へ下りて行って、舟で湖の向こう岸のカファルナウムという土地へ行こうとしておりました。同様の話が記載されているマタイ福音書、マルコ福音書には、「それからすぐ、イエスは弟子たちを強いて舟に乗せ、向こう岸へ先に行かせ、その間に群衆を解散させられた」とあります。弟子たちが向こう岸へ渡ろうとしたのは、イエスに命じられたからだったわけです。イエスはなぜ弟子たちだけでガリラヤ湖の向こう岸に渡らせようとされたのでしょうか。きっとイエスは、弟子たちの将来的な宣教活動を見据えて、弟子たちを育てようとされていたのかも知れません。

もうずいぶん昔のことですが、タクシーに乗った時に、「週に2回以上社員を怒鳴

りつける経営者の皆様へ」というパンフレットを見つけました。週に 2 回以上社員を怒鳴りつける経営者なんて、いろんなハラスメントが指摘されるこの時代ではありえないことですが、ありえないといいながらも、部下が自殺するまで追い込むような役所があったり、そんな事実があるにもかかわらずイスにしがみついて辞めない県知事がいたりしますから、民間でもまだまだブラックな企業はありそうです。まあとにかく、そのタクシーに備え付けてあったパンフには「この冊子には、あなたのことが書いてあります」と添え書きがしてあって、中を開いてみると、こう書いてあるわけです。「『同じことを何度も言わせるな！もっと頭を使え！』という言葉、それは、言うだけ無駄です。極端な話、バカな人に『賢くなれ』と言ったところで、そんなことは不可能です」と。「ダラダラするな！やる気を見せろ！」という言葉に対しては、「残念、いくら尻を叩いても、本人が決めた目標を、他人がムリヤリ上げることはできません」と書いてあります。さらに「お客様の気持ちになって考えろ！」という定番の言葉には、「残念ですが、それは酷な話です。コミュニケーション能力の低い人に、相手の気持ちは読めません」と。そして、結論として、「育たない人材は、どれだけ時間をかけたところで育ちません。その人材が『できる』かどうかは、採用段階で100%決まっているのです」としめくくってありました。結局この冊子は、企業に人材採用のアドバイスをする会社のパンフレットだったようなのですが、非常にさびしーい、かなしーい気持ちになったものでした。

まあそういう仕事の会社ですから、仕方ないことかもしれないのですが、「だめな奴はいつまでたってもだめ」なんて、イエス様はそんなことは絶対に言わないでしょう。もちろん人によって向き不向きはあるかもしれない。でも、イエスは弟子たちを素質のあるなし、向き不向きで選ばれたわけではなかった。素質のあるなし、向き不向きでいうなら、私なんか福祉も牧師も落第ですよ、ほんとに。イエス様が弟子たちを選ばれたのは、それはどんな者であっても、それぞれに必ず与えられている何らかの賜物を活かす形で、神様の御用を必ずなすことができるのだ、という神様からの一方的な、限りない恵みであったわけです。素質でいえば、イエス様はむしろ素質のない人や向いていない人をあえて弟子として選ばれたとしか思えない。でもイエス様は、自分に与えられた賜物を自分自身で見つけ出し、神様のために用いることができるように、という願いや、アンタたちならきっとできるよ、という思いを込めて、弟子たちを夕闇迫るガリラヤ湖に送り出したのではないでしょう

か。

ともあれ、弟子たちは暗い中ガリラヤ湖に漕ぎ出しました。すると、強い風が吹いて、湖が荒れ始めたわけです。弟子たちは、命の危険への恐れや、暗闇の向こうで自分たちを待ち受ける何かに対する恐れでいっぱいであったことでしょう。この暗闇の湖の情景は何を表しているのか。それは、イエス様が不在の中で前へ進もうとするキリスト者たちと、その行く手を阻もうとするこの世の様々な誘惑や試練という荒波の様子、かもしれません。この弟子たちの姿は私たちの姿と同じです。私たちは週に一度、教会に集い礼拝を守ります。そして日曜日を終えてからの日常の生活、私たちはイエス様不在の中でこの世の荒波を何とかして乗り越えようと四苦八苦、がんばっている。強い風の中で舟を漕いでいる弟子たちと同じです。でも、弟子たちも私たちも、イエス様がおられない今、自分が頑張らなければ、と自分のことで精いっぱいになってしまってはいないか。神様もイエス様も、決して私たちを孤独にはせず、私たちから心を離さず目を離さず見守って下さっているのに。

今日の19節には「25ないし30スタディオンばかり漕ぎ出したころ、イエスが湖の上を歩いて舟に近づいて来られるのを見て、彼らは恐れた」と書いてあります。マタイ福音書の同様の記述においては、「イエスが湖上を歩いておられるのを見て、『幽霊だ』と言っておびえ、恐怖のあまり叫び声をあげた」とあります。神様やイエス様は今おられないと自分で思いこみ、自分がやらなきゃ、自分でやらなきゃ、って自分のことで精一杯になっているから、心配して様子見に近づいて来られるイエス様の姿を、自分たちを襲う荒波と同様に見間違い、幽霊だなどと失礼な叫び声を上げてしまうのです。私たちが結局自分たちの力しか信じていないから、自分たちの理解を超えたイエスの姿を見て恐れてしまうのかもしれません。しかしイエスはそんな私たちに対して「私だ。恐れることはない」と言います。恐れなくていいんです。恐れてはだめです。よく見て下さい。あなたの目の前にいるのは幽霊じゃなくてイエス様なんです。

週に2回も部下や子ども、誰かに対して怒鳴っちゃう人、怒鳴らなくていいんです。もっと違う方法で、あなたの気持ち、あなたの思いは伝えることがきっとできるんじゃない？って、イエス様がその人の姿を借りて問うておられるのかもしれません。きっとできます。あなた一人でその人を育てなきゃってがんばらなくていい。いろんな

周りの人の力を借りましょう。週に2回も怒鳴られる側の人、怒鳴られるのが怖くて仕方ない人、自分の価値に自信が持てなくなっている人、恐れなくていいんです。恐れてはだめです。怒鳴るのはもちろん絶対だめだけど、でも例えば「同じことを何度も言わせるな！」は、ひっくり返せば「大事なことを忘れそうだったら、メモとかしといたらいいかもね」という意味かもしれません。「だらだらするな！」は「いついつまでにここまで出来てたら、めっちゃ助かるー！」という意味かもしれません。「お客様の気持ちになって考えろ！」は、「自分が相手の側だったとしたら、どう感じるかなあ？」という意味かもしれません。キリストは、世界中の数々の昔話や伝説が語るように、必ずしも私たちの望む姿、イメージしている姿で現れるとは限らない。時には憎たらしい敵の姿やみすぼらしい姿で現れ、私たちに問いを投げかけられる。ちょっと嫌な言い方でいうと、私たちを試されるわけです。神様のそんなちょっとした意地悪に、まんまと引っ掛からないようにしたいです。

でも、これはくれぐれも誤解してほしくないのですが、それは「どんなひどいパワハラを受けても我慢してがんばれ」ってことではない。相手からの厳しい言葉を「こういうメッセージかもしれない」ととらえ直す心の力さえ失ってしまったなら、すぐに逃げましょう。どんなメッセージが込められていようと、パワハラは絶対に駄目だからです。怒鳴るのは、そいつが無能な証拠なんです。人を育てるというのは、愛と忍耐がどれほど必要なことか。それを我慢できないいらだちが暴言となってほとばしり出ているだけなんです。そんなところからは、さっさと足の裏のほこりを払って立ち去った方がいい。大丈夫。聖書の神様は何度でもチャンスをくださる方です。そこでだめでも違うところであなたの賜物を活かせばいいんです。イエス様は私たちのことを決して見捨てず、湖の上のように私たちの思わぬところから、いつも私たちのことを見ていて下さっています。しんどい時こそ、恐れずに周りを見渡し、相手をよく見ましょう。波は高くても、イエス様はどこからか見ていてこちらに近づいて下さっているかもしれない。

私たちが自分たちの無力さを謙虚に受け入れて、キリストからのメッセージに聞きつつむやみに自分でがんばろうとすることをやめた時、その時はじめて私たちは、日常においてそれぞれが直面している困難を乗り越えることがきっとできることでしょう。なぜなら、弟子たちがイエスを舟に迎え入れようとすると間もなく、舟は目指す地に着いた、と今日の箇所の最後に書いてあるからです。彼らがイエスを舟

に迎え入れ「たら」、目指す地に着いたのではないんです。迎え入れ「ようとしたら」、その舟は目指す地に付くことができたと書いてあるんです。ですから、結果は問題ではない。自分で乗り越えなきゃ、っていう思い込みから解放された時、向こう岸に着くことは決定しているのです。恐れることはない。主イエスはいつも私たちと共にいて下さり、そう語りかけて下さる。イエス・キリストが私たちと共にいて下さる限り、私たちに恐れるものは何もないのです。

最後になりましたが、本日は「部落解放の祈りの日」礼拝ということで、今も厳然と残っている部落差別のために涙を流している人たちが差別から解放されますように、あらゆる差別がこの世からなくなりますように祈りを重ねましょう、と日本基督教団部落解放センターが呼びかけている日です。特に大阪は日本最大の被差別部落を有する土地です。私の友人がある時、高校時代の話で、やはり自分が被差別部落出身であることがいつばれてしまうだろうかといつもびくびくしていて、あの頃は毎日が怖かったなあ、と淡々と語ってくれたことを思い出します。

差別について語っていると、「そうは言っても実際あの人らは怖いんでっせ、そんな実態知ってますか」という問いにぶつかる時があります。確かに中にはそういう者もいるかもしれません。しかし、それは元をたどれば差別を跳ね返そうというところが原点になっているわけで、右翼ややくざに被差別部落出身者や在日の人が多いというわさが本当だとしても、やはり誰からもばかにされたくない、なめられたくないという思いからそうなったのではないでしょうか。しかし少なくとも私が出会ってきた人々や私の友人は、差別の苦しみに悔し涙を流しながらも、暴力に訴えることなく人として当たり前に生きていきたいという願いをもった人々でした。そういう出会いをすることなしに、ただ噂話やネットの適当な情報に振り回され踊らされて、何がしかを知ったかのように振舞う姿は滑稽でしかない。そしてそれは、部落であろうと在日であろうと障がい者、外国人であろうと同じです。怖い奴も悪い奴もいるかもしれないけど、それはいわゆる一般の私たち、部落でも在日でも障がい者でも外国人でもない私たちでも同じです。私たちも日常の中で知らず知らずのうちに、もっともな理由をつけて誰かを差別して遠ざけてしまっているかもしれません。直接顔を合わせてつながることで、恐れからも差別からも互いに解放されてゆきたいと願っております。